

書評

平体由美・小野直子編

『医療化するアメリカ・身体管理の二〇世紀』

(彩流社、二〇一七年三月)

牧田 義也

一 本書の射程と意義

本書は、二〇世紀前半のアメリカにおける身体管理の諸問題に対して、「医療史」という視点から新たな光をあてた研究書である。二〇世紀転換期以降アメリカでは、医学知を含むさまざまな科学的知識が社会に広く浸透していった。医学知は、たとえば人種やジェンダー等をめぐる集団間の権力構造に科学的正当性の装いを付与し、健康や病、障害に対する人々の理解と対処法を方向づけ、労働や食事、子育てや余暇といった日常生活のさまざまな局面に影響を及ぼした。こうした医学知の社会的浸透は、すでに多くの研究者によって指摘されている。ただし、それらの指摘は人種関係やジェンダー規範等、他の主題を説明する際の補

完的論点として挙げられることが多かった。そのため、「医療」自体が研究の主題として前景化することは、日本のアメリカ史研究では稀であった。本書が果たす最大の学術的貢献は、従来さまざまな研究領域において別個に分析されてきた医療に関わる諸問題を、身体管理をめぐり、「医療史」という分析枠組を通じて、統合的に理解する視点を日本語で提供したことである。

本書は、身体の医学的管理に関する多様な事象を総合的に分析するための道具として、「医療化」という概念を導入する。本書「はじめに」によれば、アメリカでは一九世紀後半に至るまで、一般的に健康の維持や病への対処といった事柄は、私的・個人的な問題として理解されてきた。しかし、一九世紀末から二〇世紀中葉にかけて、健康や病は、専門家の助言と指導の下で、公的・社会的な対応を要する問題群へと変化した。本書の目的は、二〇世紀以降に世界各地で進行したこの変化のプロセスを「医療化」と呼び、世界運動である医療の専門化・社会化のなかでアメリカの特徴がどのようなものであるかを検討することである。このように本書は、二〇世紀前半の「アメリカの特徴」を理解する上で、医療史という分析枠組がもつ潜在的有効性を提示した点において、日本におけるアメリカ史研究の画期をなす業績として位置づけることができよう。

二 各章の概要

第一章「知的障害をめぐるポリティクス…

『精神薄弱者問題』と移民制限

(小野直子)

小野論文は、一九世紀後半以降のアメリカにおける「精神薄弱者問題」について、同時期の移民制限政策との関係に注目して考察する。本論文はまず、二〇世紀転換期の退化理論の影響下で、知的障害者が社会的な重荷・脅威として認知されたことを指摘する。そして、同時期に制定された移民制限諸法が、知的障害者の入国を拒否する条項を伴っていたことを説明する。さらに、多くの移民が流入したニューヨーク州の知的障害者施設について叙述する。これらはいずれも二〇年以上前から指摘されてきた重要な論点である。ただし、本論文内でこれらの論点が相互に有機的に結びつけられることはない。知的障害をめぐる言説と制度の影響関係や、連邦移民政策と州の医療・福祉政策との関連性などが、本論文では積極的に論証されることなく並記される。たとえば本論文は、エリス島の移民検査官が精神薄弱の特定と分類のために、ヴァインランド精神薄弱児訓練学校のヘンリー・ゴダードを「招いた」こと、そして入国検査における知能検査の有用性について、ゴダードがアメリカ精神薄弱研究協会で「報告した」ことに触れて

いる。しかし、実際に知能検査が入国審査に導入されたのか、あるいは少なくとも移民局内で導入が検討されたのかは不明のままである。こうした叙述は、多くの場合閲覧制限が課される知的障害関係の非公刊史料の地道な収集を欠いたまま、関連報告書や雑誌記事などに依拠した結果であろう。

第二章「ヘンリー通りセツルメントと医療、社会、政治…

二〇世紀転換期ニューヨーク市における『訪問看護』の現場から」

(松原宏之)

松原論文は、二〇世紀転換期のアメリカにおける訪問看護事業の社会的意味について、ニューヨーク市でリリアン・ウォルドが創設したヘンリー通りセツルメントの事業に焦点を当てて考察する。本論文は、公衆衛生史やジェンダー史、移民労働史など複数の補助線を引きながら、訪問看護事業の政治文化史を描き出している。同時期の訪問看護婦たちは、臨床現場を主導した経験に裏打ちされ、狭義の看護事業を越え出て、政治的領域へと活動範囲を拡張していった。しかし、第一次世界大戦後の専門職化にともなあって、訪問看護事業の政治性・社会性は失われていった。卓抜した筆致ゆえにかえってわかりづらいが、本論文はとても緻密な史料分析に基づいて叙述されている。本論文の

課題はヘンリー通りセツルメントの歴史的位置づけに関わる。ヘンリー通りセツルメントとその創始者リリアン・ウォルドが、訪問看護事業の発展に対して決定的に重要な役割を果たしたことに、おそらく異論はないだろう。しかし、ハルハウスがその活動規模と社会的影響力ゆえに、大多数の中小セツルメントと同一視されないように、ヘンリー通りセツルメントの活動は、訪問看護事業の全般的趨勢と同一ではなかった。本論文の議論は、同時期の東部諸都市で続々と設立されたミルクステーションや、セツルメント付属診療所を拠点とする中小の訪問看護事業の動向と対照されることで、その歴史的意義がより明らかになるはずである。

第三章 「産業看護婦による移民のアメリカ化…

安全運動と訪問看護運動との協働」（上野継義）

上野論文は、二〇世紀初頭の産業看護婦の活動を、移民のアメリカ化という論点と関連づけて考察する。産業看護婦は、工場労働者とその家族のための福利活動と労働環境の改善に従事した。そして、同時期の安全運動の普及と相俟って、産業看護婦の存在も労働現場に浸透していった。本論文は、労働者福祉に関わるさまざまな仕事が見護的介入の対象として再定義されていく過程を「ウェルフェアの

第四章 「農村住民の健康意識改革にむけて…

二〇世紀初頭南部のコミュニティ・ヘルスワークとその限界」（平体由美）

平体論文は、農村部における公衆衛生事業の拡充過程について、南部農村地域に導入されたコミュニティ・ヘルスワークに焦点を当てて考察する。ロックフェラー衛生協会

等の地域外団体による時限的支援として導入されたコミュニティ・ヘルスワークは、南部農村地域の公衆衛生意識向上に貢献することが期待された。一九一〇年代には、合衆国公衆衛生局がコミュニティ・ヘルスワーク支援に乗り出すことになる。これらの事業は、農村部における地域公衆衛生局の創設に一定程度貢献したものの、南部の政治状況や資金・人材難などが原因で、当初期待された成果を十分にあげることができなかった。ただし、こうした初期の試行錯誤の延長線上で、一九三〇年代に再活性化された公衆衛生事業に対する地域住民の合意形成を理解できることが、本文末尾で暗示される。都市部における公衆衛生制度の発達に注目してきた従来の研究史に対して、本論文は農村部の公衆衛生という観点から重大な修正を加えている。類似した状況は南部以外の多くの農村地域でも見出されるはずであり、本論文の意義は南部に限定されない広範な文脈で理解されるべきである。

第五章 「二〇世紀前半までのアメリカ病院制度の発展」

『公共空間』の主導権をめぐる争い (山岸敬和)

山岸論文は、二〇世紀前半までのアメリカにおける病院制度の発展を、公的アクターと民間アクターとの関係性の變動に着目しながら考察する。二〇世紀初頭までに、民間

史苑 (第七八巻第二号)

病院はアメリカの医療制度のなかで公的役割を果たすようになった。しかし、二度の世界大戦を経るなかで、母子・退役軍人を対象としたプログラムを通じて、連邦政府が医療分野での権限を拡充した結果、「公共空間」における民間病院の従来地位が脅かされるようになった。こうしたなかで、大恐慌や戦時政策に対応して発展したブルークロスは、連邦政府の介入に対して民間病院が対抗する基盤を提供した。さらに、戦後冷戦期の思想環境のなかで、民間病院は民主主義を体現する存在として位置づけられた。そして、このような歴史的経緯を通じて、民間病院に対する「規制なき公的助成」がアメリカの医療制度のなかで定着したと結論づける。植民地期から現代に至るアメリカの病院制度の歴史をわずか三〇頁でまとめ、医療をめぐる公と民の関係性という「大きな絵」を描き切る離れ技である。

三 本書の課題

本書全体の課題について、ここでは「医療化」という概念に焦点を絞って論述する。そもそも、二〇世紀アメリカの歴史において、医療化はどのような過程であったのか。二〇世紀転換期以降、アメリカでは医療職の専門分化が進展した¹⁾。そして産婦人科や小児科、整形外科、精神科等

の新興医療部門が独立した専門部局としての地位を確立させる過程で、治療対象の拡大が生じ、それまで医療の対象外であった諸問題の医療化が進行した。一般に医療化 (medicalization) とは、医療行為の対象とされてこなかった事象が、病気或は障害として、医療的介入の対象に再定義される過程を指す。この時期、出産補助の役割は産婆から産婦人科医へと移り、乳幼児の栄養問題は幼児外来診療所で訪問看護婦によつて指導されるようになった。共同体内の「厄介な隣人」は軽度の精神病者という認定を受けるようになり、同性愛、アルコール依存症、薬物中毒症が病的状態として医学的に定義された。日常生活の諸問題や社会的逸脱行動が医療的介入の対象となる一方で、移民の入国管理業務の中で医療検査による健康性の判定が入国許可決定の要件となる等、医学的まなざしは社会全般の諸事象に浸透していった。⁵⁾

ただし、医療専門職はこの医療化の過程を独占的に方向づけることができたわけではない。チャールズ・ローゼンバーグが指摘するように、医療化とは西欧社会の長期的趨勢であったとしても、医師の主導の下で一方的に進行する過程だったのではなく、医学的な概念と実践の新領域への適用は多方面での対立と交渉を含む社会的争点となった。⁶⁾ 疾病・障害・健康に関する医学的理解は、ときとしてその

社会的理解と齟齬をきたした。医学的に定義された事象が、医療施設の現場運営者や行政官吏、そして患者自身やその家族を含む多様な関係者の反対・抵抗・修正に直面し、結果として脱医療化 (de-medicalization) 現象が生じることもあった。⁷⁾ 二〇世紀初頭の新興医療部門は、その科学的權威をまだ十分に確立できておらず、医療現場では関係者間の対立が表面化した。たとえば、「精神薄弱」の判定をめぐって、複数の医療関係者間で診断が一致せずに二転三転する「境界事例」が多出する一方、貧困層の一部が診断の曖昧さを逆用し、困窮時の生存戦略として収容施設の入退所を繰り返す事例も多発した。⁸⁾

このように医療化を、医師・看護師等が独占的に方向づける一方的な過程ではなく、患者等による抵抗・転用・折衝を含む双方向的な過程として理解するとき、本書の分析枠組が抱える困難が浮かび上がってくる。本書には、医師や看護師、科学者や行政官吏など、多くの医療関係者が登場する。しかし、患者等の「医療の受け手」はほとんど現れない。少なくとも彼らの「顔」が見えてこないのである。従来は医療行為の対象とされてこなかった領域に医師や看護師が進出してきたとき、患者等は何を経験して、どのように反応したのか。「医療の受け手」の経験に関する叙述が欠落したままでは、医療化という過程に含まれる社

会的な相互作用を十分に説明することはできない。もちろん、患者等の経験を描くことは、必ずしも彼らの行為主体性 (agency) を強調することと同義ではない。医療をめぐる集団間の権力構造の中で、患者やその家族が無力な場合もありえるだろう。ただ、たとえ受動的であるにせよ、医療現場における患者等の経験 (experience) を捨象しては、医療化という過程の全貌を明らかにすることはできない。医療化という過程は、医療関係者だけで構成される閉鎖空間で進行するのではなく、患者等との相互作用を通じて変質し、場合によっては抵抗や転用を引き起こしつつ、広範な社会的文脈のなかで展開するからである。

編者によれば、本書は現代アメリカ社会が抱える医療問題について「いかにあるべきか」を問うものではなく、「二〇世紀前半のアメリカ社会における制度的、文化的、科学的諸力が『いかにあったか』を示すものである」。しかし本書は、少なくとも医療化という過程について、それが「いかにあったか」を十分に示すことができていない。そして、それは本書執筆陣だけの問題というよりは、日本においてアメリカ医療史に関わるすべての研究者が引き受けるべき課題であろう。研究はまだ緒に就いたばかりである。

註

- (一) Paul Starr, *The Social Transformation of American Medicine: The Rise of a Sovereign Profession and the Making of a Vast Industry* (New York: Basic Books, 1982).
- (二) Peter Conrad, *Medicalization of Society: On the Transformation of Human Conditions into Treatable Disorder* (Baltimore: the Johns Hopkins University Press, 2007), 5. See also Peter Conrad and Joseph W. Schneider, ed., *Deviance and Medicalization: From Badness to Sickness* (Philadelphia: Temple University Press, 1992); Ivan Illich, *Medical Nemesis: The Expropriation of Health* (New York: Pantheon, 1976); Irving Kenneth Zola, “Medicine as an Institution of Social Control,” *Sociological Review* 20, no. 4(1972), 487-504; “Healthism and Disabling Medicalization” in *Disabling Profession* by Illich, Zola, John Mckinght, Jonathan Caplan, Harley Shaiken (New York: Marion Boyars, 1987), 41-67.
- (三) Janet Lynne Golden, *A Social History of Wet Nursing in America: From Breast to Bottle* (New York: Cambridge University Press, 1996); Jacqueline H. Wolf, *Don't Kill Your Baby: Public Health and the Decline of Breast Feeding in the Nineteenth and Twentieth Century* (Columbus: Ohio University Press, 2001); Harvey Levenstein, “Best for Babies’ or ‘Preventable Infanticide’?: The Controversy over Artificial Feeding of Infants in America, 1880-1920,” *Journal of American History* 70, no. 1(June 1983): 75-94.
- (四) Elizabeth Lunbeck, *The Psychiatric Persuasion: Knowledge, Gender, and Power in Modern America* (Princeton: Princeton University Press, 1994); Sarah W. Tracy, *Alcoholism in America: From Reconstruction to Prohibition* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2005); Jennifer Terry, *An American Obsession: Science, Medicine, and Homosexuality in Modern Society* (Chicago: University of Chicago Press, 1999); Christna Matta, “Ambiguous Bodies and Deviant Sexualities: Hermaphrodites, Homosexuality, and Surgery in the United States, 1850-1904,” *Perspectives in Biology and Medicine* 48, no. 1(Winter 2005): 74-83; David T. Courtwright, *Dark Paradise: A History of Opiate Addiction in America* (Cambridge: Harvard University Press, 2001).
- (五) Amy L. Fairchild, *Science at the Borders: Immigrant Medical Inspection and the Shaping of the Modern Industrial Labor Force* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 2003); Alan M. Kraut, *Silent Travelers: Germs, Genes, and the “Immigrant Menace”* (New York: Basic Books, 1994); Douglas C. Bayton, “Defectives in the Land: Disability and American Immigration Policy, 1882-1924,” *Journal of American Ethnic History* (Spring 2005): 31-44.
- (六) Charles E. Rosenberg, “Contested Boundaries: Psychiatry, Disease, and Diagnosis,” *Perspectives in Biology and Medicine* 49, no. 3(Summer 2006): 407-424, esp. 408.
- (七) Conrad, *Medicalization of Society*, 97-113.
- (八) Yoshiya Makita, “The Ambiguous Terrain: Articulation

of Disability in the Municipal Administration of New
York City in the Early Twentieth Century,” *Journal of
American and Canadian Studies* 26(2008): 68-74.

(立命館大学政策科学部助教)